

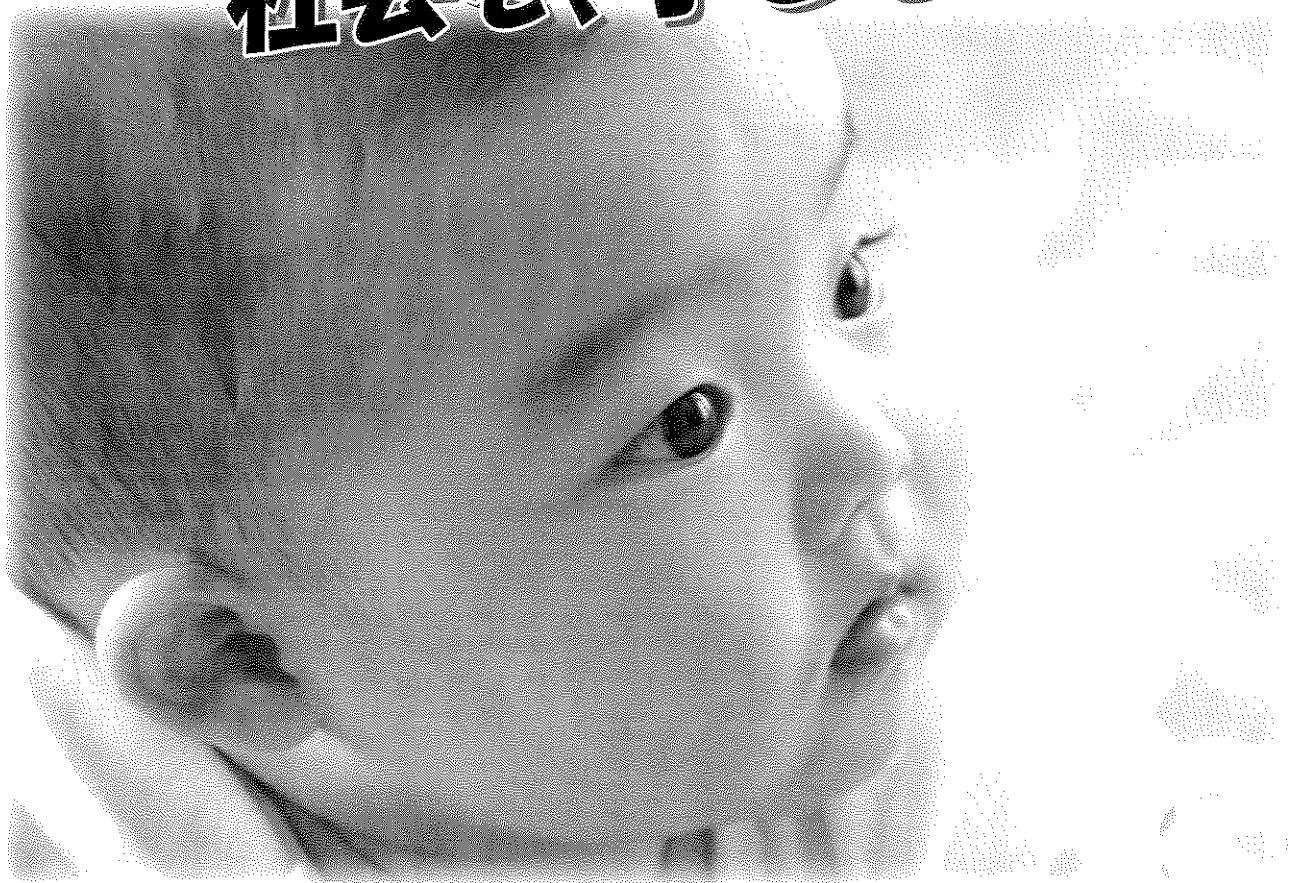
反核医師ジャーナル

第66号 発行:核戦争に反対する医師の会・愛知

2012年10月30日
vol.31 No.2

(名古屋市昭和区妙見町19-2)
愛知県保険医会館気付
TEL052-832-1345

核兵器も原発もない! 社会を、子どもたちへ



- 「核兵器全面禁止のアピール」国際署名をはじめとする行動を通じて、核兵器禁止条約の交渉開始を求める国際的な世論を発展させよう。
- 原爆写真展など被爆の実相を普及するためにいっそう力を尽くそう。
- 原発依存からの脱却と自然エネルギーへの転換を求める広範な運動をさらに発展させよう。いかなる核の被害者もつくりたくないことは、核兵器廃絶と原発ゼロをめざす二つの運動の共通の願いである。

【原水爆禁止 2012 年世界大会国際会議宣言より】



反核医師の会30周年記念講演会

ヒロシマの『あの日』から『これから』を語る

— 被爆医師の証言 —

肥田舜太郎氏

核戦争に反対する医師の会・愛知は五月十九日(土)の午後、愛知県保険医協会伏見会議室で三十周年記念講演会を開催。医師や市民ら二百五人が参加した。講演の要旨を紹介する。

(文責編集部)

福島原発事故

二〇一一年三月十一日の福島原発事故で、大量の放射性物質が放出された。

ウランとプルトニウムを混ぜたMOX燃料で運転されている原発からは、原爆と同じ放射能が出る。かつて被爆者が広島・長崎で経験したことに同じことが必ず起こるだろうと考えた。急性の放射線被害も現れるが、多くの被爆者が苦しめられた、

労働ができず、社会から孤立し沈黙していく「原爆ブラブラ病」と呼ばれる困難な慢性症状が出てくるのではないかと心配している。福島や放射線量の高い地域に住む人々が、そういう目に合わないためにどうしたら良いかという話を、広島で経験したことから伝え

たい。

軍医としての被爆体験

「あの日」の記憶

二十八歳のとき医学部を卒業し、広島陸軍病院に配属された。

ここは爆心から三百五十メートルの距離だった。八月五日の夜は病院に泊まっていたが、深夜に知り合いの農家の子どもが発作を起こし、約六キロメートル離れた村へと往診に出かけた。たのでたまたま助かった。

子どもの発作は無事収まり、七時まで仮眠して病院に戻るつもりが、寝坊して八時過ぎに目が覚めた。子どもを診察しているうちに原爆が落とされた。

ピカッと光ると同時に、顔や手など露出している部分に熱を感じた。光から遅れて、強烈な爆風が家の中を吹き抜け、私も子どもも五メートルほど吹き飛ばされた、自分の視界の先に

天井が見えたが、それが吹き飛ばされて青空が見えたのを憶えている。

落ちてきた屋根の泥に埋もれ、子どもの無事を確かめ、安堵した。外を見上げると、キノコ雲が見えた。できたばかりのそれは、巨大な火柱であった。

とにかく病院に戻らなくてはと、自転車を借りて広島市内へ向かったが、もうすぐ広島市内という所まで来たものの、火の手が激しくそれ以上は進めなかった。病院へ戻ることは断念するしかなかった。自分にできることは村に帰って、避難してきた人の救護をすることだと思い、手を合わせ村へと戻った。

救済活動で未知の症状が

村には、沢山の人が避難してきていた。小学校の運動場には、足の踏み場もないくらいに人が倒れていた。軍医も何人か集まってきたが、聴診器も薬もないので何もできない。

村は数日の間に三万人以上の被爆者でいっぱいになった。最初の三日で死んだ人の死因はみな「火傷」と書いた。しかし、九日の朝以降、四十

度の高熱を出している患者が居るといふ。喉から血が出たり、生きていくのに扁桃腺とその周辺が真っ黒に腐り、もの凄い腐敗臭を出すなど、今まで見たことも聞いたことも無い症状だ。ひじの内側には紫色の斑点が十五、六個出ている。また、患者が頭を手でなでると、触った部分の毛がすーっと取れる。毛根細胞ごと簡単に抜けてしまう。四十度以上の高熱、喉からの出血、口の中の腐敗、紫斑、脱毛——この五つの症状が揃った被爆者は皆、数時間で死んでしまう。

ところが、「私はピカにあつていません」という人がいた。福山の部隊から救援に駆け付け、二日二晩働いた後に気絶して倒れ、村に連れてこられた。ピカでやられた人も診きれていない状態だったので、原爆に遭っていないなら風邪でもひいたんだらう、とそのままにしてしまった。三日経ってそこへ行くと、その人がいないので軍医に尋ねると、「死にました」と言われ驚いた。みんなと同じ紫斑や脱毛の症状が現れて亡くなった。本当は、ピカに遭っていないのに何故紫

色の斑点が出るんだ、と聞きたかったのだろう。

その後も直爆を受けていないのに同じ症状で亡くなる人がたくさん出てきた。皆、二日目に降に、家族を捜したり救援活動などで広島市内に入った人だった。その事から何かが広島市に残っていて、後から入った人もそれに影響を受けて病気を起こすのではないかとしか考えられなかった。

占領軍による 被爆内部被ばくの隠ぺい

アメリカにとって原爆はソ連に対する絶対的な軍事機密だったが、その被害についても同様被害を受けた人自身が自分の症状について話すことも許されない。自分の体がどうなっているかということも家族にも言っていないのだ。

医師についても、被爆者を診る事は義務だから許されるが、その結果を詳しく書き残したり、それを元に論文を書いたり、複数の医師で研究や調査を行ったりとすると、占領軍として厳罰に処すという。

被爆者が自分の故郷に帰って病気が出て医者にかかり、被爆したことを話そうとしても医者は処罰を恐れて聞こうとしなかった。そういうことが日本全国で起こった。政府は占領下の七年間、調査も救援もしてこなかった。結果、被爆者が何人いたか、最初の一年で何人亡くなったのかも分からないままだ。アメリカはこの様な非人道的なことを軍事機密の名で行った。

三十年前から世界各国を回り、医者や医学者を相手に被爆の真相を話して歩いてきたが、いつも最後に、日本政府が調べた報告が聞きたいという事を言われたと伝えると、そんなことをやったのかと驚かれる。

政府は、「広島についてはアメリカが設置したABC C(原爆傷害調査委員会)が専門的に調査を行って世界に報告を出し、内部被ばくは無いと宣伝している。アメリカが無いという以上無い」という立場。

しかし、私がこの目で見てきた人々の死は内部被ばくが原因としか思えない。それが間違っている、無かったと言われても

納得できない。事実だから、何れも占領軍に捕まり、殺されると思つたこともあつたが、この事だけは言い残してから死ななければならぬと思ひ、話すことをやめなかった。

生命と原発は共存できない

現在でも放射線という目に見えない被害が人間にどう影響を与えるのかという学問はない。一方で核保有国は、新しい高性能な核兵器を作るために優秀な学者を集めて莫大な資金を注ぎ込み、原爆を作り続けてきた。そのためにウラニウムを掘り、工場で精製し爆弾を作る。その全ての過程で沢山の人が被曝し、がんで亡くなっている。

挙句の果てには潜水艦用に作った原子炉を、戦争が終わり使えなくなつたからと、電気を起こし、他国にも売りつけるということをやってきた。

また、原発から出される放射線について、ここまでは出ては仕方がないという安全許容量がある。この「安全許容量」とは、

発電所の経営の安全に障らない範囲の設備投資で対応できるものであり、人間への影響は全く

考慮されていない。原発は、科学が進んで絶対に安全と言えるようになるまでは、人間の生活と一緒に置いてはならない。生命と共存できないというのが真理だ。

被ばくと向き合い どう生きるか

—自分の命の主人公に

被爆者からの相談の多くは放射線の被害で死ぬことなく、どうやって寿命いっぱい生きられるかという事。そんな事を聞きに来る人が沢山いたが、分からない。長生きしている人たちに秘訣を聞こうということになり、食べすぎが悪い、便秘がいけない、早寝早起きで免疫を作る、そういう経験が集まつてきた。大昔から人間は太陽と一緒に生きてきた。そのように形作られた人間の生理に背くことをやっ

てはならない。不養生な生活で、具合が悪くなつてから医者に行くという生き方ではだめ。自分が「自分の命の主人公」になつて、ひたすら健康に生きようと努力するし

か無い。人間の祖先は、海から上がり、太陽とともに生きるようになる長い進化の過程で、自然の放射線に対しては免疫を持つようになった。

政府は原発から出た放射線も自然の放射線と同じだと言っているが、人工の放射線は人間にとって初めてのもので、「同じ」と論ずることは間違っている。

福島原発事故で母親たちが大きな衝撃を受けた。日本の世論が大きく動き「原発やめろ」といううねりが出てきた。今日までの日本でこんな大きなエネルギーはなかった。運動の経験が無い普通の人が、子どもを守るためにどうしたらいいのかと大きく揺れ動きはじめた。

政府や財界は、原発を再び動かそうとする。みんなの力が弱ければ動き出してしまふ。間違つて汚れた地球を作つてしまった私たちは、何も知らずに生まれてくる子孫たちが被害を受けまいように、生きていく限り「すべての核兵器をなくし、すべての原発を止める」という一番大切な義務を果たしていかなければならない。

第23回反核医師のつどい 開催要項

と き：6月10日(日)
と ころ：平和と労働センター(東京)

講演

- 「福島原発における内部被曝」
郷地秀夫氏 (東神戸診療所)
- 「核兵器のない平和で公正な世界をめざして」
高草木博氏 (原水爆禁止日本協議会代表理事)

シンポジウム

「核兵器廃絶に向け、ICAN 運動を草の根からすすめよう」

- 川崎哲氏 (ピースポート共同代表)
 - 山中智恵子氏 (新日本婦人の会)
 - 大久保賢一氏 (日本反核法律家協会事務局長)
 - 朝長万左男氏 (赤十字長崎原爆病院院長)
- コーディネーター 原和人氏 (反核医師の会常任世話人)

①福島原発事故と原爆は全然違う。福島は福島である。

②外部被曝と内部被曝は全然違う。福島原発事故の中心は内部被曝である。

③揮発性放射性物質と粒子状放射性物質は全然違う。福島は放射性粒子状被曝が問題。

④福島原発事故は放射性粒子による内部被曝が中心であり、局所集中型被曝である。したがって「何が起るのか、全力で見守っていかねばならない！」次に福島原発と広島原爆との比較をした。

ウラン235の放出量は広島原爆の六〇九倍、セシウム137は百六十八倍、セシウム137は二・五倍だった。

放射線影響研究所寿命調査第十四報は一九五〇年から二〇〇三年までの調査である。それによれば「放射線に安全な線量はない。少量でも、その量に比例した発がん性がある。それは年々、増加する」。「固形がんの過剰相対リスク」ではこの間のがん死亡者一万九百二十九人のうち五百二十七人は被曝によって増加した数だとしている。この調査の被曝による過剰死亡の将来予測では二〇二〇年前後にがん過剰死亡のピークが来るといふ。被曝七十五年後だ！

チェルノブイリ事故後、一九八五年から二〇〇七年までの甲状腺がん発生率は人口十万人当たりで五倍を超えている。

福島県のホールボディカウンターの検査の「預託実効線量」が公表され、一割以上が二十五人(〇・一六%)、一割未満が一万五千三百八十三人(九九・八%)だといふ。この預託実効線量一割Svとはセシウム137が二十万ベクレル体内に入ったことを意味すると。

ついで郷地先生は「内部被曝と外部被曝―その本質的な違い」を話された。これは岐阜の松井英介先生のお話と同じ。

松井先生は原爆などによる外部被曝は、一瞬に全身に一度だけ大量の放射線を浴びる。これに反し内部被曝は全く様相が違ふと話している。

五ミクロンのウラン235(赤血球は八ミ)は十七時間ごとに(年間約七百回)α線を出す。これは赤血球五個分四十ミしか飛ばないが、この間に十萬個の原子分子をイオン化する。つまりDNAに傷がつく。傷ついたDNAの修復過程で修復誤りが起きると細胞は癌化するわけ。またα線は紙一枚でも遮蔽されるという。だからホールボディカウンターではつかまらない。

先ほどの福島県などのホール

ボディカウンター検査がその点でどんな意味を持つのか、質問したが、回答はよく聞き取れなかった。

高草木博氏の講演報告
「核兵器廃絶をめざす世界取り組み」
世話人 山本 節子

二〇一〇年のNPT再検討会議の前進は、五主要核兵器国が、核兵器の完全廃絶を将来は達成することをめざして、すべての国が核兵器禁止条約の交渉を始めその枠組みを確立する特別の努力をすることを、潘基文事務総長の提案に沿って了承したことでした。

今年の四月には次の二〇一五年NPT再検討会議の準備会がおこなわれ、日本からの核兵器全面禁止を求める署名一五四方筆提出とともに、被爆者代表も現地で行動し、原爆展を各地で開催するなどあらたな運動がすすめられてきています。毎年恒例の行事の繰り返しではなく、具体的な廃絶への動きがでてきているのは、草の根の市民運動が推進力として重要な役割を

第23回核戦争に反対し、核兵器廃絶を求める 医師・医学者のつどい

核兵器も原発もない社会を、 子どもたちへ

参加報告記

二〇一二年六月十日「第二十三回核戦争に反対し、核兵器廃絶を求める医師・医学者のつどい」が東京で開催され、全国から百五十九人、愛知から八人が参加した。

参加者からの報告を掲載する。

郷地秀夫氏の講演報告
「福島原発における内部被曝」
世話人 大川 浩正

郷地先生はまず、次のことをお話しした。

①福島原発事故は放射性粒子による内部被曝が中心であり、局所集中型被曝である。したがって「何が起るのか、全力で見守っていかねばならない！」次に福島原発と広島原爆との比較をした。

ウラン235の放出量は広島原爆の六〇九倍、セシウム137は百六十八倍、セシウム137は二・五倍だった。

放射線影響研究所寿命調査第十四報は一九五〇年から二〇〇三年までの調査である。それによれば「放射線に安全な線量はない。少量でも、その量に比例した発がん性がある。それは年々、増加する」。「固形がんの過剰相対リスク」ではこの間のがん死亡者一万九百二十九人のうち五百二十七人は被曝によって増加した数だとしている。この調査の被曝による過剰死亡の将来予測では二〇二〇年前後にがん過剰死亡のピークが来るといふ。被曝七十五年後だ！

チェルノブイリ事故後、一九八五年から二〇〇七年までの甲状腺がん発生率は人口十万人当たりで五倍を超えている。

福島県のホールボディカウンターの検査の「預託実効線量」が公表され、一割以上が二十五人(〇・一六%)、一割未満が一万五千三百八十三人(九九・八%)だといふ。この預託実効線量一割Svとはセシウム137が二十万ベクレル体内に入ったことを意味すると。

ついで郷地先生は「内部被曝と外部被曝―その本質的な違い」を話された。これは岐阜の松井英介先生のお話と同じ。

松井先生は原爆などによる外部被曝は、一瞬に全身に一度だけ大量の放射線を浴びる。これに反し内部被曝は全く様相が違ふと話している。

五ミクロンのウラン235(赤血球は八ミ)は十七時間ごとに(年間約七百回)α線を出す。これは赤血球五個分四十ミしか飛ばないが、この間に十萬個の原子分子をイオン化する。つまりDNAに傷がつく。傷ついたDNAの修復過程で修復誤りが起きると細胞は癌化するわけ。またα線は紙一枚でも遮蔽されるという。だからホールボディカウンターではつかまらない。

先ほどの福島県などのホール



シンポジウムで発言する各シンポジスト

なっているといえます。

日本政府の従来の姿勢は、アメリカの核の傘が日本の安全に必要であるとの立場から、常に核廃絶に消極的とみられても仕方のないもので、被爆国としては情けない状況です。しかし、さきのNPT再検討会議でブラジルやフィリピンなどの非同盟諸国は期限をもうけた核廃絶をせまり、期限こそは退けられましたが、具体的な軍縮の進展が二〇一四年の準備会までに報告されることを確認しました。

会議での最終文書の行動計画冒頭に「核兵器使用の破滅的な人的影響を憂慮し、すべての国がいかなる時にも国際人道法を含む関連国際法を遵守すること」と明記され、準備会では、核保有国をふくむすべての国に国際法・人道法順守を求め、次回再検討会議に反映させることを求めた十六カ国連名の声明が提出されました。核兵器の使用が人道法に反するという点で、すべてのひとが一致できる立場からの核廃絶の実現にとりくむほうが、抑止力の呪縛に縛られずに進める可能性が見出されます。

以上が先生のお話の要約です。なかでも、先生が、ビキニ水爆実験被害を受けたロンゲラップ島の村長がアメリカ人医師に島民のモルモット扱いを拒否する手紙について説明され、島民がプルトニウムを実験のために注射された事実が明らかになったという話はその異常さが印象に残りました。軍事大国の都合で非人道的行為が戦時でない場合でも平然とおこなわれる軍事活動の異常さを犯罪として裁けない理不尽さについて、考えさせられました。

シンポジウム報告
「核兵器廃絶に向け、ICAN運動を草の根からすすめるよ」
事務局次長 土井 敏彦

シンポジウムは、各パネリスト(四ページプログラム参照)の発言の後、質疑を行い、高草木博さんからの助言、最後に司会・コーディネーターの原和子さん(反核医師の会代表世話人)がまとめを行った。

川崎哲さんは、昨年愛知の二十九周年記念講演会にお招きした人で、核兵器廃絶国際キャンペーン(ICAN)の副代表にもなっている。「国際交流NGO団体での核兵器廃絶のとりくみ」をテーマに、ICAN運動の最近の活動を紹介した。

NPT再検討会議・準備委員会(WIIN)で、各国が核兵器禁止条約締結を迫る動きについて語った。NPT再検討会議では十六カ国が核兵器の破滅的結果の声明を出した。NATOの国も入っていたが、日本は誘われなかった。日本政府は、核は国際人道法に違反していないという立場。核の傘に入っていないから。

年末にはフィンランドで中東非核地帯設立のための国際会議が開催される予定で、ピースボートはこの動きを市民として応援するための会議を開いた。また、今年広島で会議をするIPPNWが大事と述べた。

山中智恵子さんは、四歳の子どもを持つ若い看護師で「婦人・女性分野での核兵器廃絶のとりくみ」をテーマに発言した。

昨年原水禁世界大会開会総会で「残りの人生を核兵器廃絶に捧げる」と発言。核兵器廃絶運動の決意をさせたのは、福島原発事故と、新婦人との出逢いだっただけ。核兵器全面禁止アピール署名で街頭に立つと「無視する人が多いが落ち込まないのか？」と青年が問いかけてきて、自分も署名を集めてくれた。身近なところでも感動していると報告した。

大久保賢一さんは、昨年「反核医師のつどいin埼玉」で、印象に残る話をした人。反核法律家協会には三百五十人が加入している。「法律家分野での核兵器廃絶のとりくみ」と題して話した。同協会は、原発問題に対し

では今まで取り組み不十分だったが、昨年の総会で原発から脱却を決めた。

日弁連はNPT再検討会議をうけ、①核兵器禁止条約、②北東アジア非核、③非核三原則を非核法に宣言する。政府は消極的で「法律化すると変えられてしまうから」と反対している。

核エネルギーについてNPTでは「奪い得ない権利」とされている。原発は権利であり、それをふまえての運動の大切さを強調していた。

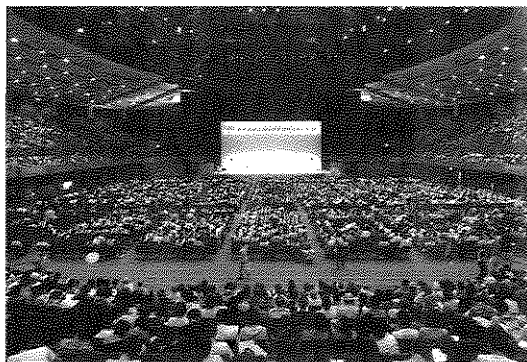
朝長万左男さんも、鹿児島での反核医師の会で講演をされた長崎大名養教授。「医療分野での核兵器廃絶のとりくみ」について報告した。

国際赤十字(ICRC)の核廃絶運動について。ジュネーブ国際赤十字・赤新月社代表者会議で核廃絶決議を満場一致で採択。政府代表の加わった合同会議では決議できなかった。政府に対し、人道的外交をせまる必要性を述べた。長崎大学・核兵器廃絶センター(RECNA)が唯一の被爆大学につくられたことにも触れられた。

核兵器のない平和で公正な世界を

原水爆禁止二〇一二年世界大会

「核兵器のない平和で公正な世界のために」をテーマに、原水爆禁止二〇一二年世界大会広島大会が八月四〜六日に広島県立総合体育館などで開催された。反核医師の会からは土井敏彦事務局長、山本節子世話人を代表派遣した。



核兵器廃絶へ

国内外から参加

今回の大会は、二〇一〇年NPT再検討会議で「核兵器のない世界の平和と安全」の実現に合意したことを受け、その実行が問われている中での開催となっ

また日本被団協代表委員の坪井直氏が壇上上がり、「二十歳の時、爆心地から1kmの地点で被爆。仮治療所に運ばれるとき、幼い女の子を、燃えさかる街の中に置いてきてしまった光景が忘れられない。生きていく間に核兵器がなくなることを信じている」と挨拶した。

原発と放射線障害などで分科会

た。今年から二〇一五年のNPT再検討会議の準備が始まり、多くの非核兵器国が事態を動かそうと強い決意で臨んでいる。今年是非同盟諸国とともに、NATO加盟国を含む十六カ国が、共同で核兵器使用の禁止を訴えたことが注目されている。

四日の開会総会には、国連軍縮問題担当上級代表のアンゲラ・ケイン氏など、国際機関や各国の平和運動団体から多くの参加があり、六千八百人が参加した。総会では、松井一實広島市長が「六十七年前、一発の原子爆弾によって一瞬で街が破壊し、十四万人の命が奪われた。被爆者の方は相次いで亡くなっている。被爆体験を胸に刻み、共に核兵器廃絶を実現させよう」と挨拶。

五日には広島市内など各地で、二十のフォーラムや分科会が開かれた。「核兵器と原発」放射線被害の根絶のために」の分科会では、二本松市環境放射線低減対策アドバイザーの野口邦和氏

を講師に学習を深めた。野口氏は原発事故について、広島は原爆投下直後、「草木も生えない、人は百年住めない」と言われたがすぐに住み始めた。チェルノブイリでは事故後二十五年経っても人が戻れない地域がある。同じウランの核分裂でありながら違いがでるのは、核分裂連鎖反応を行った時間と、核分裂したウランの量の違いだ。広島では八百五十gのウランが千万分

の一秒という短い間に一気に核分裂したのに対し、福島原発事故では毎日約六・五kgのウランが核分裂し、約二年間運転したところで事故を起こした。原子炉から出される放射性物質の放射線の絶対量が原爆よりはるかに多く、長期間核反応させていたことよって、半減期の長い放射性物質の割合が多くなり、放射能の影響が長期間続いた。

このような点から、福島放射線障害の発生が心配され、住民が暮らす地域の一刻も早い除染、復興が必要になると述べた。

核兵器廃絶へ取り組み 発展させよう

六日、広島市の平和記念式典が、爆心地に近い平和記念公園で開かれ、被爆者や遺族、市民ら五万人が参加し、広島県や政

府代表、七十二カ国・地域の大使らが参列。八時十五分原爆投下時刻に、黙とうを行った。松井広島市長は「平和宣言」で、来年八月に広島市で開かれる平和市長会議総会を通じ「核兵器禁止条約の締結、さらには核兵器廃絶の実現を願う圧倒的多数

の市民の声が発信される」と述べ、会場からは拍手が飛び交った。また政府に対して、市民の暮らしと安全を守るためのエネルギー政策を一刻も早く確立することを求めた。

同日の開会総会には、約七千二百人が参加した。総会では、青年たちが次々に登壇。「被爆体験を広げ核兵器廃絶につなげたい」「被爆者と歩みたい」「米軍欠陥機オスプレイはいらない」と、活動への決意を元気に語った。

国連の潘基文事務総長の代理としてアンゲラ・ケイン軍縮問題担当上級代表が出席し、「核兵器廃絶という崇高な目的を達成する上でみなさんをパートナーとすることを誇りに思います」との潘事務総長のメッセージを代読し、「みなさんの粘り強い努力が成功を収めることを願っています」と激励した。

最後に、「核兵器全面禁止のアピール」署名の運動を、地域ぐるみの取り組みで、大きく発展させましょう」と訴える「広島からのよびかけ」を採択して幕を閉じた。

世界の躍動を実感

反核医師の会・愛知 事務局次長 土井 敏彦

大会は、国際会議のあと、八月四日(土)〜六日(月)の三日間、広島県立総合体育館(グリーンアリーナ)をメイン会場として行われた。私は、仕事で初日の開会総会には参加できなかったが、以後、六日の広島市主催の「原爆死没者慰霊式・平和記念式典」を含め参加した。原水禁大会に参加したのは、初めてだった。

五日(日)は分科会。十九の分科会の中で、私は第十分科会・シンポジウム「核兵器・原発/私たちの未来―原発からの撤退―自然エネルギーを考える」に参加した。

まず、福島わたり病院の齋藤紀医師が福島の現状について報告。ついで、島根大学の上園教授は、省エネ推進・効率化で、原発無し、しかも温暖化防止も達成できること、など話された。最後に、国際反核法律家協会共同議長のパッカー博士は、ドイツで脱原発に舵を切った経緯に

つき詳しい話をされた。昼には、福島県浪江町の馬場有(たもつ)町長が来場し、全町民が町外へ避難している現状と、今後脱原発で進んでいく決意を語られた。

六日(月)は、早朝平和公園で行われた、広島市主催の「原爆死没者慰霊式・平和記念式典」に参加した。公園内の多くの碑の前にはテントと椅子が並べられ、ポークスカウトが献花用の花を、道行く参加者に配っている。この日は広島が全市慰霊の町になることが実感された。なるほど考えてみれば、今日は数万人の人たちの命日なのだ。この日、ここに来なければわからないことかも知れない。

その後、「開会総会」に参加した。国連軍縮担当上級代表・アンジェラ・ケインさん、ジョセフ・ガーンソンさん、マーシャル・グラム、ロシア、ヨーロッパの若者など海外の方々、日本共産党の志位和夫さんなどの、挨拶・決意表明があった。核兵

器廃絶はじめ、脱原発、オスプレイ配備反対など、世界が躍動している、という実感がもてた集会であった。

米軍岩国基地を視察

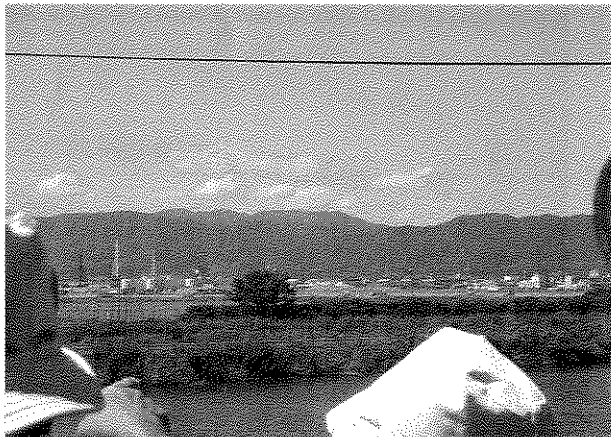
反核医師の会・愛知 世話人 山本 節子

昨年に続いて、二回目の広島大会参加で、今回は動く分科会に参加しました。岩国基地の視察でしたが、総勢二百五十名ほどで、二十五人乗りの貸切バス十台で広島駅から出発しました。私の乗ったバスでは、岩国の

新婦人支部の方二人がガイドをしてくれて、米軍基地の誕生の歴史、岩国の抱える問題など詳しく話を聞きました。沖繩同様、米兵による犯罪被害が数多くあるけれど、沖繩ほど強い基地反対が起きない岩国の土地柄があるとも説明されました。

基地反対の市長が選挙で敗れ、今の市長になって補助金が学校給食に使われ、一生徒に五円だけなのに、食器などに基地交付金で助成されると明記されているそうです。

オスプレイが陸揚げされ、収容されたばかりで、格納庫に入らないオスプレイ二機を遠方から見ました。垂直離陸するため、離陸時の熱風に耐えられるようなオスプレイパッドがこれから作られるとか、事故に加え低空飛行による被害



オスプレイが陸揚げされた岩国基地を遠方から視察した。

も相当なものになりそうで、心配です。周囲はレンコン栽培がさかんでハスの花があちこちに咲いて、サギなどが飛び回っていました。オスプレイの訓練がはじまったら、その姿も見られなくなるかもしれません。基地に隣接して、建設中の岩国民間空港がもうすぐオープンだそうです。米軍機の訓練のすぐそばに民間機が行きかうとなると、さらに事故が起きやすくなるし、この国の人は何を考えているのか理解できません。

視察は午前、昼食前に済み、午後は二時間ほど岩国城、錦帯橋や美術館など自由に見学をしました。古くからの城下町らしく、京都のように文化財が多くあります。これらの維持費補修費も基地交付金を利用してしていると推測されます。帰り道で、愛宕山の一角をバスからながめました。十年以上かけて山を削り、土を川までベルトコンベアで運び船でさらに、岸部に運んだそうです。道路沿いの家の多くに米軍住宅はいらないと書いた黄色の旗が掲げてありました。基地反対、がんばれ!

核戦争防止国際医師会議

世界大会を広島で開催

愛知から7人が参加

八月二十四日(金)〜二十六日(日)、第二十回核戦争防止国際医師会議(IPPNW)の世界大会が「ヒロシマから未来の世代へ」をスローガンに広島(広島国際会議場)で開催された。世界大会の日本での開催は二十三年ぶりで、福島原発事故が起こった直後の日本での開催という事もあり原発問題への対応に注目が集まった。四十五カ国約五百人が参加し、愛知からは医師・医学生・事務局の七人が参加した。

参加者からのレポートを紹介する。

全世界的に着実に

実践の輪が

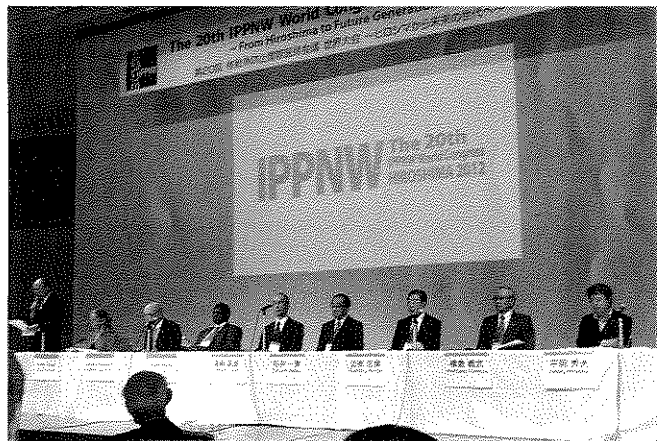
世話人 板津 慶幸

IPPNWへの参加は初めてでした。二十四日、二十五日の二日間の参加でした。四十五カ国から五百人が参集し、外国の医師達が目立ち、会場は真剣な雰囲気にかけていました。全世界的に着実に実践の輪が広がっていることを感じるとともに、報告者の多くが呼びかけていることは若い人たちへ

の働きかけの重要性でした。

開会式では平松広島県医師会長や横倉日医会長の挨拶、ロシア・プーチン大統領からのメッセージ紹介がありました。近衛日赤社長は二〇一一年の国際赤十字の核兵器廃絶決議について報告して、人道法に反すること、結果に誰も対処できないことをあげた。原発についても同様の観点から議論していること、日赤のこの態度は貴重だと感じた。

基調講演で秋葉前広島市長は、被爆者には核抑止力があり、特



開会式の模様。平松恵一IPPNW日本支部長(広島県医師会長)とともに、近衛忠輝国際赤十字・赤新月社連盟会長、横倉義武日本医師会長が並ぶ。

に若い人が被爆者から話を聞くことの大切さを強調。二〇二〇年までに核廃絶のゴールを目指して国際平和都市会議を提唱し

頼もしい、若者の

ナイフで活発な議論

代表 徳田 秋

IPPNWの第二十回世界大会が広島で開かれた。仕事の都合で二日目から出席することにして、下り新幹線の始発に乗った。

た。オーストラリア赤十字のヘレン・ダーラム氏も若者を中心に行動している実践を報告、感心した。

全体会議のテーマICANでは、代表ティルマン・ラフ氏がICAN運動が各国で広がっている報告があり、ピースボート川崎哲氏は非人道性から人間の安全保障の問題であること、禁止条約へのcore group づくりを訴えた。

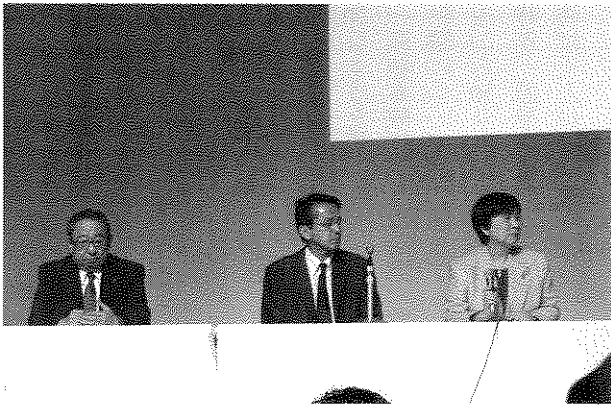
反核医師の会から応募したワークショップが二題とも採用されること、

また新幹線のなかった頃だが、広島で民医連主催の被爆者医療研修会があり、前夜の夜行便で出かけたのだが、尾道あたりから激しい車酔いに襲われ、広島に降り立ったときには完全にグロッキー。やっと辿りついた会場の隣室でうつらうつら。肝心の研修会のことほとんど覚えていない。

そんな不快な思いのある広島行きだが、山陽新幹線開通後は二、三度ほどこともなく往復している。

二十三年前に同じ広島で世界大会が開かれ、そのときの薄れかかった記憶を辿ると、今度の大会はさまざま違いがあるように思う。

当時からJPPNWを名乗る



注目された「被爆二世シンポジウム」
 左から調漸(しらべすずむ)氏(長崎大副学長)、鮫島弘一氏(サンパウロ大学医学部放射線科)、檜山桂子氏(福原医院理事長、元広島大学原爆放射線医学研究所准教授)。
 大会の開会式では、被爆医師の証言もプログラムに盛り込まれた。

きくとり上げられていたのは、高校生など若者の参加が大幅に増え、原水禁世界大会の参加者にも若い人が多かったと聞いています。一時期、平和問題の集會といえはほとんど高齢者ばかりだったことを思えば喜ばしい。ことに午後開か

れた「ユースサミット」のナイヴで活発な議論は頼もしかった。独断かもしれないが、ヨーロッパ、アフリカ勢の発言が目立ち、中国とロシア、それに韓国・北朝鮮からの参加がなかった(？)ことが少し気になった。原子力発電と核兵器とが分かちがたく結びついているという認識は、国際的にも広く共有されつつあるという印象が強く感じられた。



反核医師の会が主催した二つのワークショップ「脱原発から核廃絶へ」「原爆症認定制度改革への取り組み」と『黒い雨』について」はどちらも会場一杯の参加があった。(写真：脱原発から核廃絶へのワークショップ)

求められる医師の責務

世話人 能登 正嗣

志を同じくする全世界の医療者が核の脅威に対抗して真摯に討議したことに大きな意義を認めた。私にとつては初めての参加であり、慣れない国際大会、同時通訳に苦労をしながらもその雰囲気、熱意に触れ得たことは大きな喜びでもあった。

今回のテーマは「ヒロシマから未来の世代へ」で、ここ広島での開催が決定されたのは二〇一〇年であり、東日本大震災福島原発事故の前年で、何か因縁を感じさせるものであった。日本の核による被災は広島・長崎で十分に世界的に知られているが、このたびの原発事故で三度目となり、参加各国代表の発言もそれを踏まえてのものが多かったと感じた。そこには日本の発する核に対する意志表示が少し物足りない、核被爆先進国の日本に、また医療者にもっともっと大きな警告を發して欲しいとの願いが感じられた。

その反面、被爆二世と言われる実際の被災経験のない若い世代の活動が目立った。被爆二世医師シンポジウム、そしてユースサミットがあり、熱心な討論がなされた。ここでは核兵器だけでなく原子力エネルギーの利用についても「核時代」の終結を宣言した。ユースサミットでは国内外の高校生が議論。次世代が関心を受け継ぐ気概を見せたことが、今大会のテーマ「ヒロシマから未来の世代へ」に合致するもので大きな成果と言えるものである。

一方、IPPNWにおいて二〇〇七年に立ち上げられたICAN「核兵器廃絶国際キャンペーン」は幅広く国際的市民キャンペーンに育ちつつあり、また是非とも進めていかねばならないものである。我々医師及び医療に関わるすべての人々は、密接に核の脅威を実感し理解している。従って平時であれ戦時であれ、その責務は一般の人々に強く求められている。反核の平和勢力と力を合わせてこのキャンペーンを推し進めていかねばならないと、このたびのIPPNW世界大会で認識を新たにしたい。

医の倫理に反核の概念が加えられることを切に願っている。

のは広島県医師会そのものであり、医師会とは別の組織づくりをしてきた私たちは何かと冷遇され、居心地のよくない空気だったような記憶で、スポンサーのマツダ自動車がいるところで幅を利かせていたことも思い出した。

今回は、私たち「核戦争に反対する医師の会」に結集する団体からの参加がほぼ半数を占め、前回とはかなり空気が違っていた。それはワークショップの企画に二枚が与えられたことにも表れていた。

受付で手渡された袋が意外に

重いので中を改めると、IPPNWの創始者・初代共同会長だったバーナード・ラウン博士の自伝的回顧録「生存のための処方箋 (Prescription for Survival) (B5版三百四十ページ)」がズシリと現れた。

あとがきを読んで分ったのだが、碓井静照氏(前JPPNW会長・故人)が、著者から翻訳出版を依頼されていたものを、本大会の記念事業として急遽刊行され、日本の参加者に配布されたものであった。

プログラムを見て気づいたのは、高校生など若者の参加が大

きくとり上げられていたのは、高校生など若者の参加が大幅に増え、原水禁世界大会の参加者にも若い人が多かったと聞いています。一時期、平和問題の集會といえはほとんど高齢者ばかりだったことを思えば喜ばしい。ことに午後開かれた「ユースサミット」のナイヴで活発な議論は頼もしかった。独断かもしれないが、ヨーロッパ、アフリカ勢の発言が目立ち、中国とロシア、それに韓国・北朝鮮からの参加がなかった(？)ことが少し気になった。原子力発電と核兵器とが分かちがたく結びついているという認識は、国際的にも広く共有されつつあるという印象が強く感じられた。

原発による健康影響を
明らかにするといふ社会的な
要請にどう応えていくのか

会員 大塚 健太郎

(岐阜大学医学部五年)

はじめに

私がIPPNW世界大会に参加しようと思ったのは、福島第一原発事故による放射線の健康影響について、内部被ばくの観点から知りたかったからです。

昨年、原発事故が起きてから、被ばくとはいつたいうふうものなのか学んだり、千葉県のホットスポットの地域で不安に暮らす人々の声を聞いたりしました。

その中で強く感じたのは、放射線量の高い地域に住む人にとって、被ばくから自分あるいは家族をどう守ればよいのかという問題は、生活上の根本的な課題そのものということでした。目に見えない放射性物質とたたかうために、それが健康にどんな影響を与えるのか科学的に明らかにすること、いま医学に求められているのはまさにそれではないのかと思います。私はこれまで広島へは二回行ったことがありましたが、核廃絶を原発

問題とつなげて考えたのは今回が初めてでした。

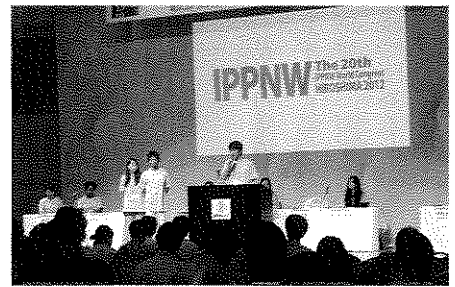
医学生に期待されていること

一日目の秋葉忠利前広島市長の「核なき世界」期限付きの完璧なビジョン」と題した基調講演の中で、核兵器廃絶への有効な治療薬として必須の要素が若い人たち・医学生であると話されました。「今の学生が被爆者の最後の聞き手となることで、自分を被爆者の立場において考え、そうすることで、核の問題を認識し解決への意識を持つこと」が重要であると語られました。

また、ピースボート共同代表の川崎哲氏は、医療者の役割として「被爆者は六十七年前の体験の苦しみは今も続いている。肉体的苦痛だけでなく精神的・社会的影響を統合して被爆の実態をつかみ、伝えていく」ことが大切であると発言されていました。

核兵器の非人道性

IPPNW北米地域代表副会長のアイラ・ヘルフアンド氏による、限定的核戦争および米ロ



頼もしかった高校生・医学生
主催のユースサミット

の核戦争が起きた場合の人類、生態系、地球への影響についての話には衝撃を受けました。「核の冬」という言葉は知っていましたが、そのリアルさは今回初めて知りました。特に、限定的核戦争ですら十億人の人々が餓死するという話を聞き、ブッシュ政権時、核兵器の先制使用を選択肢に入れていたアメリカは、国家の安全保障を本気で考えていたのか疑問が湧きました。

どのようにして核廃絶を進めていくのか? 川崎哲氏は核兵器の非人道性を広げていくことを訴えました。国と国とのパワーバランスを人道の問題に転換していくこと、つまり、国家の安全保障をグローバルな人間の安全保障にシフトすることです。

具体的に川崎氏は、核兵器禁止条約を国際的に結実させるために、非核国を主要国として地域ごとにコアグループを作ること

を提唱されました。しかし、核兵器禁止条約について、日本政府は「時期尚早、保有国の賛成を得られない」という立場で、アメリカの核の傘の下で自国で判断できない弱さをもっています。だからこそ、市民の力で、政府が核兵器の非人道性を訴える力となるように働きかけることが大切であり、二〇一三年三月のオスロでの会議を核兵器禁止条約に至る足がかりとさせた

いと強く呼びかけていました。川崎氏の発言で印象的だったのは、「原子力の安全神話があった。核兵器があっても使われな」というのも神話ではないか」という言葉です。日本で浸透している核抑止力論を、それが非道徳的で違法であり、政治的にも不健全で、安全に対する人々のニーズに反するという理由で否定すること(ロバート・グリーン「核抑止なき安全保障へ」)

で乗り越え、多くの人々の力で平和を実現するための代替的な国際的非核戦略を追求する方向

へと政府を動かすことが求められていると実感しました。

安全なエネルギーという課題

今年の広島平和宣言では、「我が国のエネルギー政策について、『核と人類は共存できない』という訴えのほか様々な声を反映した国民的議論が進められています。日本政府は、市民の暮らしと安全を守るためのエネルギー政策を一刻も早く確立してください」とあるように、核廃絶と原発ゼロを同時に考えることは、唯一の被爆国としてヒロシマ・ナガサキの思いを共有するならば当然だと思えます。

今回のIPPNW世界大会でも、「原子力の平和利用」について見直すことは大きなテーマでした。「IAEAが原子力の平和利用と称して核エネルギー利用を世界中に拡大することは、核の軍事利用が可能であれば誤った概念だ」とIPPNWドイツ支部のラーズ・ポールマイヤー氏は述べていました。核兵器と原発が双子であることを指摘するラーズ氏の次の言葉は印象的でした。「一方で核兵器の削減を言いながら、同時に原子力の

平和利用を広げるのは、喫煙を勧めながら肺癌をなくするようなもの」だと。

放射線の健康影響についての議論

一日目のワークショップは反核医師の会主催の「脱原発から核廃絶へ」に参加しました。沢田昭二先生の講演は、被ばく者の疫学研究から内部被ばくの実態に迫るものでした。「原爆の遠距離被ばくを明らかにすることで、福島の内被ばくを解明することにつながる。放射線は個々の被ばく者のデータを所有しており、それを公開させることで内部被ばくの影響を明らかにすることが必要だ」と沢田先生は話されました。

今中哲二氏は、チェルノブイリ原発事故による健康被害の公式発表と実際の住民被害との差について、事故から六年経った後によく発覚したことを話されました。それでも、陸軍化学部隊の兵士は軍の病院へ送られたため、いまだに健康影響を把握できていないとのことでした。

反核医師の会のワークショップでは、被ばくの実態について、

まだわからない点もあるがそれを明らかにしていくことが課題であるという立場であるのに対し、全体会議で話された広島の放射線医学の研究者の方々は「外部被ばくと内部被ばくに違いはない」という立場でした。全体会議後のディスカッションでは、会場から「批判的意見を紹介しない」ことへの不満が述べられ、何人かの参加者からIPPNNW独自の放射線影響の調査の必要性が訴えられました。

私が放射線の健康影響を科学的に研究する姿勢として感慨深いと思ったのは、日本赤十字社長崎原爆病院院長の朝長万左男



現地の実行委員会の学生と、左端が筆者の大塚氏。

氏への「なぜ、被ばくに関する研究をするのか？」という質問に対する答えです。朝長氏は二点おっしゃいました。一つは、核の非人道性を明らかにすること、もう一つは、被ばく者の健康管理をするために科学的に明らかにする必要があること、です。

IPPNNW世界大会に参加して考えたこと

参加する前、ある医学生と話して「医師として原発にどう向き合うのが正しいのか？」と問われて考えていました。

たしかに、人々の健康を守る医療者としては、健康被害をもたらす原発をなくしていくことに多くの医療従事者は一致できるのかなと思います。しかし、原発の是非について、医師として一致点を出すことが果たしてできるのかは疑問です。その学生の言う「医師としての「正しさ」を「正義」ととらえると、そもそも医師としての社会的立場、医師に求められていること、そのことを抜きにしては考えられないからです。

原発事故後のいま、医師に求

められているのは、健康被害を最小限に抑えるための健康調査、診療、あるいは原発立地地域付近の汚染の調査や健康被害の疫学調査、さらには内部被ばくや放射線防護についての研究などがあります。

では、放射線医学に携わる医師をはじめ、いまの日本の医師集団がどれほどこうした社会的な要請に応えているのか。

IPPNNW世界大会に参加してさまざまなと知ったのは、医師として被ばくに対する態度が一致しているわけではないという事実です。いまの日本には、低線量被ばくや内部被ばくがどれほど人体に影響を与えるのかという点について、さまざまな立場の医師がいます。それは、被ばくメカニズムが、まだ科学的に明らかになっていないからといえますが、日本の場合は、その他に大きな理由があります。

肥田舜太郎先生の講演で聞きましたが、日本では戦後、医師が独自に原爆による被ばくの実態調査をすることをアメリカによって罰則つきで禁止され、健康への影響はアメリカの立場（内部被ばくはないとする）をそのまま受け取るしかなかったということです。

たとえ立場が異なっていたとしても、医師として原発を考えると、科学的にはまだ明らかになっていない低線量被ばくについてどういう態度をとるのかという点が決定的に重要だと思います。

それは、水俣病の実態調査を長年されてきた高岡先生が言うように、疫学的データをとることで、病態生理のメカニズムが今の医学で説明できないからといって、原発事故による被ばくの影響を否定してはいけないというものです。

つまり、医師として原発に向き合うとは、原発による健康への影響を科学的に明らかにするという社会的な要請にどう応えていくのかという点に尽きるのではないかと。大変シンプルですが、それが医師としての「正しさ」＝「正義」ではないか、私はそう思います。

日本で開催されたIPPNNW世界大会そのものが貴重でしたが、そこで知り学び、出会った医学生や高校生との交流はさらに貴重なものでした。

● 会費納入のお願い ●

二〇一二年度の会費(五〇〇〇円)の納入をお願いいたします。会費がまだの先生には郵便振込用紙を同封していますので、その用紙をご利用いただくか、左記の銀行口座あてにお振り込みください。

「核戦争に反対する医師の会」
三菱東京UFJ銀行・八事支店(普)1081297

※ご不明な点などございましたらお手数ですが、ご連絡ください。

☎ 052-832-1345

反核医師の会・愛知

総会と反核医師医学者のつどい 報告会を開催 原発事故避難者への相談活動など 2012年度活動方針決める

「核戦争に反対する医師の会・愛知」は六月三十日(土)の午後、二〇一二年度の総会と反核医師・医学者のつどいの報告会を行い、十七人が参加した。

総会では、講演会や内部被曝

問題の学習会を開催したことなどの活動報告を行った。そして二〇一二年度は引き続き全国の医師の会のつどいや今年八月に核戦争防止国際医師会議(I P P N W)の世界大会が広島で開催されることもあり国際会議への参加、被爆者への支援、原発事故避難者への相談活動などに取組む活動方針を決めた。その他会計報告と世話人体制が確認された。

また、原子力規制委員会設置関連法の成立と、原子力基本法の原子力利用の目的に「我が国の安全保障に資する」との一文を盛り込む改悪が行われた事を受け、「安全骨抜き」「原子力規制委員会設置関連法」と「原子力基本法」の大改悪に抗議し、

安全骨抜きの「原子力規制委員会設置関連法」と 「原子力基本法」の大改悪に抗議し、撤回を求める

6月20日、「原子力規制委員会設置関連法」が、民主・自民・公明・国民新党などの賛成多数で可決、成立した。福島原発事故の教訓を生かし、原子力推進機関からの高い独立性が求められていたにもかかわらず、その内容は原発の運転を最長60年と半永久的な運転を認め、しかも原子力推進の一翼を担ってきた環境省に設置するという全く骨抜きの規制組織である。また衆議院では3党案提出の当日、参議院では2日間の審議日程という、国民への説明も国会での十分な審議もなく可決が強行され、内容も審議過程も大問題である。

そして「原子力規制委員会設置関連法」の付則で目的に「安全保障」を追加し、それにともない「原子力の憲法」といわれる「原子力基本法」の原子力利用の目的に「国民の生命、健康及び財産の保護、環境の保全並びに我が国の安全保障に資すること」との一文を盛り込んだ。この「我が国の安全保障に資する」は自民党が加えるよう主張したもののだが、かねてから自民党内では「原発も核兵器保有の潜在能力」という発言がみられたように、実質的な軍事利用に道を開くという可能性を否定できない。

今回の「原子力基本法」の改悪は、諸外国、特に北東アジアに一層の緊張を生み出すものであり、同時に政府自身が掲げる、「原子力の研究、開発及び利用は、平和の目的に限り、安全の確保を旨として、民主的な運営の下に、自主的にこれを行う」という平和利用3原則を踏みこむものであり、言語道断である。

人類は放射能を無害化する能力を持ち得ておらず、放射能障害への有効な治療法もない。私たちは、いのちと健康を守る医師・歯科医師として、安全骨抜きの「原子力規制委員会設置関連法」と「原子力基本法」大改悪に抗議し、撤回を求める。

以上

2012年6月30日

核戦争に反対する医師の会・愛知 2012年度総会

撤回を求める」声明を総会で確認し、首相・マスコミ・各政党宛に送付した(右記参照)。

総会企画として開催した「核戦争に反対し、核兵器の廃絶を求める医師・医学者のつどい in 東京」の報告会では、福島の子ども達の健康調査の問題や、核兵器廃絶に向けた国際的な動きについて報告された。

※つどいの内容は四く五面参照

▼アメリカの未臨界核実験に 抗議文・「未臨界核実験に 強く抗議する」を送付

アメリカが昨年四月〜六月に強力なエックス線を用いた未臨界核実験を行ったと発表した問題で、反核医師の会・愛知は九月二十一日付けで「未臨界核実験に強く抗議する」とした抗議文をオバマ大統領宛に送付した。

今回の未臨界核実験は、オバマ大統領の就任以来五回目となるもので、同大統領自身が「核兵器のない世界の実現」を表明したいわゆる「プラハ演説」にも全く逆行するものである。

核兵器使用の全面禁止・廃絶の一刻も早い実現のために、核兵器禁止条約締結交渉の開始に積極的なイニシアチブを発揮するよう要求した。